

教科「情報」を前向きに，向上心の糧として

福岡県立嘉穂総合高等学校教諭
倉光 浩二

1. はじめに

私は，現在九州工業大学の免許法認定公開講座の1つである高等学校専修免許状(情報)の講義を受けている。本講座は今年度新たに開講されたものであり，受講資格は次の通りである。

すでに高等学校教諭一種免許状(情報)を有しており，かつ，高等学校で教科「情報」を3年間以上担当した経験があること(教育職員免許法の別表第三(第六条関係)に該当すること)

専修免許状(情報)の公開講座開講を，地元紙である西日本新聞は，『技能向上へ休日特訓』と題して毎週日曜日に掲載中の教育欄で大きく取り上げた。

その一週間前の日曜日，講義を受け終えた後，記者の方から2時間ほど取材を受けていた私であった。記事の論調としては，現職教員等講習会という“急ごしらえ”の形で，教員養成をしたつけがまわり，自信を持って授業に取り組みていないケースが多く，学校ごとの教育内容のばらつきも目立つという内容であった。中学校で，一定のスキル学習をした生徒が入学し始めた状況の中，このままでよいのかという問いかけがなされた後に，まとめとして，私が語った話の内容を次のように要約し，載せていただいた。

西日本新聞 平成18年6月11日(日) 期刊より
(前略) 情報教師による「授業研究会」を三年前から主宰し，今回の九工大講座の受講生でもある倉光浩二教諭(福岡県立嘉穂総合高等学校ITシステム科)はこう話す。「現代人に必須の情報活用能力を培う『情報』は基礎・基本の教科だ。情報教師は，技術革新によって内容が変わる教科の性格も，社会の実態に応じて自由に教材を選べると前向きにとらえ，向上心の糧にしていくべきではないか」

言わんとすることを，短い文章にまとめていただき，大変ありがたく思っている。一方で，後段の部分がかなり要約されて，主旨が伝わりにくくなっている面もあるようだ。“前向きにとらえ，向上心の糧に”という部分を少し掘り下げながら，より詳しく述べたいと思う。

2. 情報教育の学際性

本題に入る前に，いわゆる情報教育の学際性に

ついて述べてみることにする。大学の学問体系を見ると，情報に関わる学部・学科は，広く文系・理系両方にまたがって存在する。学会名としても「情報教育」「情報処理教育」「メディア教育」「教育工学」など，さまざまな言葉を冠するものがあり，百花繚乱といった様相を呈している。

父親同士が兄弟である私の従兄(中村 万里)が，筑紫女学園大学の文学部教授の職にある。方言学を専門とし，最近博多弁をまとめた本を出版して好評を博しているようだ。氏にはまた，コミュニケーションに関する著作物も数多くある。主たる分のみ，新しい順に記載しておく。

1. 中村万里編『即訳! ふくおか方言集』西日本新聞社，2005年9月
2. 中村万里『人とうまく話せますか』双文社出版，2004年5月
3. 中村万里，永淵道彦編『音声言語とコミュニケーション』双文社出版，2001年6月

なお，氏名・講演内容等の記載について，あらかじめ本人承諾を得ているので，その旨記しておく。典型的な文系学部で教鞭をとる氏が，学生に対してマルチメディア作品の提出を課している事実を知り，大変驚いた。前出の新聞記事にもあった，私が代表を務める研究会(正式名称は，「福岡情報教育授業研究会」)の研究発表会で講演を依頼した際，作品集CD-ROMを配布し，内容を紹介してくれたのだ。情報教育の上で，文系と理系の垣根がここまで低くなっているのかと感じ入った瞬間でもあった。

そもそも，私が講演を依頼した理由は，足かけ4年教科「情報」の授業に携わってきて，生徒のコミュニケーション能力を育成する取り組みの必要性を痛感したことだ。以前，献本として上記の書物ももらっていたことを思い出し，改めて目を通してみても，理系教科主導で行われている「情報」の授業に欠けている視点が述べられていると思った。そこで，自分はもちろんだが，研究会の仲間にも話を聞いてほしいと思い，講師として招いたという次第だ。

余談になるが，私に対して，地元放送局の「お

母さんに「バンザイ！」というラジオ番組に出演するという交換条件を出された。正直なところ、とまどいや不安はあったのだが、無報酬で講演を頼んだ経緯もあり、引き受けることにした。

収録2日前にアナウンサーの方から連絡を受け、当日約束の時間にスタジオに向いた。あらかじめ、アウトラインプロセッサを用いて、語る内容を整理しておいたので、細かい打ち合わせができると大変喜んでいただけた。おかげで、15分間のアナウンサーの方との対談を、阿吽の呼吸で、スムーズにこなすことができたようにも思う。

やってみてわかったのだが、身振り手振りや、板書等をフル動員できる授業と違い、純粋に音声のみで、メッセージを伝えるラジオというメディアは、自己の持つリテラシーの真贋を厳しく問われる場なのだ。瞬時に数万人の聴取者が、自分の語りを受け取るという意味でも、まさに真剣勝負である。

アナウンサーの方の技術を垣間見る瞬間もあった。番組の中程で、母親に捧げる一曲を流すのだが、曲紹介の短い語り口が、それまで私と対談していた時のそれとは明らかに異なるのだ。さすがにプロだと思った。

さて、本題の方に話を戻そうと思う。私が当日の中村教授の講演内容を記録したものを引用し、それにコメントを加える形をとりたい。

以下、福岡情報教育授業研究会・第4回研究発表会(平成18年3月12日)の中村教授の講演内容より引用する。

(前略) 金子みすゞさんの詩「こだまでせうか」

「遊ぼう」つていふと
「遊ぼう」つていふ。
「馬鹿」つていふと
「馬鹿」つていふ。
「もう遊ばない」つていふと
「遊ばない」つていふ。
さうして、あとで
さみしくなって、
「ごめんね」つていふと
「ごめんね」つていふ。
こだまでせうか、
いいえ、誰でも

自分の経験でも、昔は、「痛い」と言うと、祖母などが「痛いね、痛いね」と言ってくれた。今は、「痛い」と言うと、親や教師が、「痛くない」とか「がんばれ」とか、言っていないか。コミュニケーションは、こ

だまし合うことと自分自身では考えている。コミュニケーションがうまくいっていない人は、こだましあったらどうだろうか。

著書である『人とうまく話せますか』の本の読者から寄せられた書評で賛否両論がもっとも多かったのは、次の箇所である。

一般的に、「あの人は、心を開いてくれない。だからコミュニケーションができない」とか「心がない人は、コミュニケーションができない」とか、コミュニケーションは心との関係で考えられています。

そもそも、コミュニケーションは心と関係があるのでしょうか。心は目に見えません。心は触ることもできません。よくわからない心をもってコミュニケーションを考えることは非常に難しいと言えます。

よく、心が先か、言葉が先かが言われます。ふつうは、心が先だと考えられています。心の中に何かが起こり、だんだん表現したいと思いはじめます。そして、それを言葉にすることで詩や小説が生まれる。確かに、そう考えるのが自然です。

しかし、私たちは、生まれて言葉を使い始めてから人との係わり合いが生じてきます。また、私たちの記憶は言葉を使い始めてからあるように思います。言葉を使うことができない時期の記憶をたどることは非常に困難です。心は言葉を使うことから形づくられていくのではないのでしょうか。

例えば、「いじめ」においても、心がいじめめるのではなく、言葉がいじめめるのです。つまり、人と人の係わり合いの中で、私と他の人をつなぐのは言葉ではないのでしょうか。

言葉と言葉のやりとりの中で私と他の人の心を理解し、そうした言葉と言葉のやり取りの中にコミュニケーションが存在すると言えます。

心理学科出身の人は、コミュニケーションを心と結びつける。心の問題をいつもコミュニケーションと結びつけていないか。自分は、純然たる国語国文学科を出て研究を行ってきた。自分にとって、テーマは常に言葉である。

心はどこにあるのか？心は目に見えない。尋ねると、みなさんは、胸のあたりをさされると思う。本当に心がそこにあるのか？私には分からない。横にいる人の心は自分には読めない。バーバルおよびノンバーバルなメッセージでこそ、たとえば相手が自分を好きだと感じてくれていることがわかる。

学生時代の源氏物語の勉強等でも、心が先と言われてきた。しかし、人とのやり取りは、言葉であり、態度ではないか。楽しいから笑うのではなく、笑うから楽しいのだ。極端に言うとも、愛しているから愛しているのではない、愛していると言うから愛しているのだ。だまっていても相手のことはわからない。言葉と態度でわかる。言葉に注意をしながら、日々生きている。方言を研究している。言葉に思いやり

を持ってやったら、よりよいコミュニケーションが出来るのではないか。

岡部朗一氏の論文(1987年)によると、コミュニケーションの定義は126種類あるそうだ。また、F.ダンス氏は、4000ぐらいの文献を読んで分類した結果、次の15のタイプに分類できたそうだ。

1. シンボル、会話、言語
2. 理解 - メッセージの送出よりも受容
3. 相互行為、関係 - 能動的な交換と共同志向
4. 不確実性の減少 - 適応のために情報の探索へと導く、仮説的な基礎的欲求
5. プロセス - 伝達の順序の全体
6. 移送、伝達 - 空間と時間における意味の移動
7. 連結、結合 - 接続するもの、結合するものとしてのコミュニケーション
8. 共同性 - 共通に分けあい、保有するものの増加
9. チャンネル、伝送体、回路 - 通路や「乗り物(記号体系や技術)に特に関わりのある「伝送」の拡張
10. 記憶、貯蔵 - コミュニケーションは情報の蓄積をもたらす、その情報の貯えによってコミュニケーションできること
11. 識別反応 - 選択的な注意や解釈のプロセスの重視
12. 刺激 - 反応もしくは反作用の原因としてのメッセージの重視
13. 意図 - コミュニケーション行為の目的性質の強調
14. 時間、状況 - コミュニケーション行為の文脈への注意
15. パワー - 影響の手段として見られたコミュニケーション

(McQuail, 1984)

意味と定義が複雑である、それがコミュニケーションだ。人が1人いればそこには人と違うコミュニケーションがある。

現在、企業で求められているものも、コミュニケーション力であるといわれている。その能力について再度考えてみたらどうだろうか。

聖書にも、はじめに心ありきではなく、言葉ありきと書いてある。自分は、まず言葉ではないかと考えている。

講演を聴いて、コミュニケーションのとらえ方の難しさを改めて知ると同時に、教育の土台を奈辺におくべきか、深く考えさせられた。また、以前から考えてはいたが、情報教育の実践に際し、文系の学問体系に学ぶ必要性も再確認できた。

研究会の仲間には、「国語」や「英語」の基礎教科をもち、公開講座等で「情報」の免許を取得した方がいる。学校の事情もあり、今のところ、「情報」の授業は担当されてはいない。時が至って、将来なされるだろう授業に対し、教科「情報」に新たな

地平線をもたらすだろうと、大きな期待を抱いている。ぜひ作られるシラバスをいただいたり、実践の成果を伺ったりしたいものだ。

3. 基礎教科との兼務

平成11年度に実施された新教科「情報」指導者研究協議会に参加し、平成12年度から14年度にかけて全国で実施された新教科「情報」現職教員等講習会の講師を務めることとなった。私自身も講師の仕事の傍ら1年目に一緒に講習を受け、免許を取得した。講習会の対象教科は、数学・理科・家庭・工業・商業・農業・水産・看護の8教科であった。このうち、普通教科「情報」に主に関わってきたのは、数学・理科・家庭の3教科の教員であると思われる。ちなみに私の基礎教科は、理科(生物)である。

冒頭の新聞記事に「急ごしらえ」という表現で書かれたように、世間的には教科「情報」を基礎教科との兼務で行っている現状に対し、否定的な見方が多いようだ。本来は情報学を体系的に学んだ「情報」の専門家が教えるべきという考え方が背後にある。採用試験導入の遅れもよく指摘されるところだ。前項で述べた「情報」の学際性という観点でとらえた場合、兼務は決してマイナス面だけではないのではないかと。記事の中の「前向きにとらえ」という文言は、その意味での発言だ。

確かに基礎教科との兼務は、担当教師にとって負担増だろう。しかしながら、教材研究や評価等で苦勞しながら、「情報」を担当することで、得られるものもまた大きいのではないかと。これが「向上心の糧に」という意味だ。私は自分自身の体験からそう確信しているのである。

その1つに評価の問題がある。「情報」を担当するようになって、評価規準というものを強く意識するようになった。そして「情報」のみならず、「理科」の授業においても、評価規準の重要性を認識し、教育活動に生かすことができた。

具体的には、年度当初のオリエンテーションにおいて評価規準を説明し、さらに毎時間ごとに座学や実習における細かな評価規準を確認するという2段階構成で周知できるように心がけている。そのことによって、生徒は、自己評価をすることができるようになり、さらに上の段階をめざせるからだ。

例として、年間を通した座学に関する評価規準を示しておくことにする。

- ・授業の内容を箇条書き程度に説明できること
- ・板書を日付、ページを記した上で、きちんと漏らさずノートに写しておくこと

次に、基礎教科の教育活動を通して培ったノウハウを教科「情報」に生かすという提案をしたい。

私の基礎教科である「理科」の学習指導要領による目標は次のようになっている。

「自然に対する関心や探究心を高め、観察、実験などを行い、科学的に探究する能力と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な自然観を育成する」

目標に掲げられているように、理科においては観察・実験が必須である。最近、「情報」の実習を行うに当たって、長年培ってきた「理科」の観察・実験におけるノウハウが生かせるのではないかと考えた。特に観察・実験の際作成していたプリントのフォームは、即応用できそうに思った。

そこで Adobe Photoshop を用いた実習を行う際、生物学実験と同じ様式の実習プリントを作成した。図1が、以前生物実験で用いたプリントの例、図2が今回作成した実習プリントの1つである。

図が小さく読みづらいと思うが、いずれのプリントも、「目的」「準備」「方法」「結果」「考察」「感想・意見」という6項目で成り立っている。特にレポート作りの上で、座学の時間を利用して生徒に訴えたのは、「考察」の重要性である。

「考察」は、英語では discussion であることを板書きし、辞書で、discussion の第一の意味を生徒

に調べて発表させた。discussion が討論・議論などの意味であることを知っていた生徒はいたようであったが、「考察」= discussion であるという事実には驚きを感じたようであった。「考察」は、「結果」から、何か一つでもいいから、新しい事実を見だし、それを書くのだという説明をすると熱心に聞いていた。

果たして、次のレポートの時は、各自「考察」を書くことに対する思い入れが違って来たようである。回数を経るたびに生徒がどう成長を遂げるか楽しみにしているところだ。

レポートは、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」という4つの観点から多面的に評価し、実習の次の座学の時間に返却した。私は、答案返却の際もそうだが、必ず一言評価の言葉を添えて渡す。生徒の感想の中に、先生からもらえる「よくできているよ。がんばったね」を励みに勉強をがんばりましたという内容が多々見受けられる。このような節目ごとの小さな評価活動の大切さをかみしめているところである。

4. おわりに

現任校に異動し、担当教科が「情報」のみになった私であるが、授業を積み重ねるたびに基本的な授業技術は、教科を問わず共通であると痛感する。教職に就いて以来一貫して、生徒に勉強の楽しさを伝えられるように、「語り」「発問」「板書」などの技術を磨き上げることを常に念頭に置き、日々の教育実践を行ってきた。自己の教育技術を高めるという面で、「情報」の学習内容は大いに役立つ部分がある。教材研究や授業を通して、自分自身生徒と一緒に学び、表現力や情報活用能力を育成しているところである。

「情報」の授業は、基本的に座学と実習をおよそ半々の割合で実施している。座学の場合、教科書の内容を板書きし、説明するというオーソドックスなスタイルだが、ノート作りに力を入れていることもあり、十分に生徒を引きつけられるという手応えが得られた。「理科」における観察・実験の際と同様に、実習の際は、座学で理論面を先に学習するようにしている。座学を中心に据えてこそ、実習もより生きてくるのではないかと考えているところだ。

詳しく紹介しきれなかった実践内容等については、<http://kuramitsu.cocolog-nifty.com/>を参照されたい。

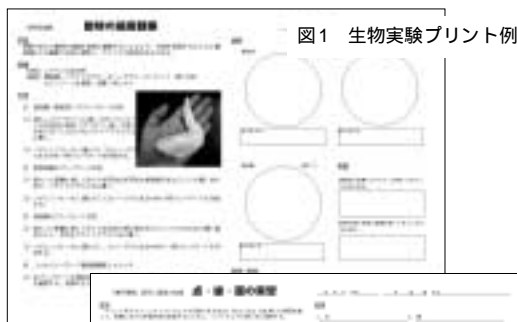


図1 生物実験プリント例

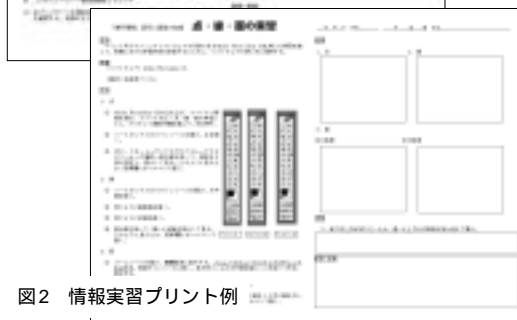


図2 情報実習プリント例